

「急性腹症の X 線診断」

長 洲 光太郎 元関東通信病院外科部長
日 野 貞 雄 元胃腸病院副院長・内科
平 松 慶 博 帝京大学助教授・放射線科

著

帝京大学教授・外科

四 方 淳 一

急性腹症のブームは、筆者が昭和39年頃、当時在勤していた墨東病院のデータをもととして臨床研究の結果を盛んに発表した頃より始まったのではなかろうか。

さて、この本の著者は3人とも筆者の知己であるが、そのうち2人は昨年身罷られた。人物的にも学問的にも尊敬に価する人達であった。ここに深く哀悼の意を捧げる次第である。残る1人の放射線医は筆者の大学の放射線科の助教授であり、X線診断のエキスパートでもある。この3人の外科医、内科医および放射線医が対話形式をとりながら診断を進めてゆく過程をペーパーに表わした試みは大変おもしろい。

大体、X線写真のみから診断することはいろいろの可能性があって、現実的でない場合が少なくない。積極的な人はスペキュレーションに走りがちになるし、逆に消極的な人は診断があいまいになる。

そもそも診断というものは、既往歴・現症歴、症状と所見、臨床検査所

見、それにX線所見等を加えて総合的に判断すべきものであり、X線所見は診断の補助手段に過ぎない。従って、臨床症状・所見等より一定の病気の可能性を考えた上で、X線写真を検討して診断を確実にすることが大切であり、さらに診断の思考過程をチェックすることにX線写真の価値があると思う。筆者の大学でも、内科・外科・放射線科を含めて消化器病カンファランスを行っているが、この本の著者である放射線科の平松助教授をはじめ各科のエキスパートのディスカッションが行われることは、若い人達にとっても大変勉強になると思っている。

急性腹症のX線診断に関しては、J. Frimann-Dahl の Roentgen Examinations in Acute Abdominal Diseases, Thomas および、M. H. Gough and M. W. L. Gear の The Plain X-ray in the Diagnosis of the Acute Abdomen, Blackwell の二著が有名であるが、この本は症例を中心として記述してある点で後者

に近い。実地医家に対しても広くおすすめできるものである。

X線写真というものは、白黒のフィルムの上に写った陰影をシャウカステンの光のもとで読むのであるから、横隔膜下気腹像とか、腸管ガス像のようなコントラストの比載的はっきりもたものはつかみやすい。しかし、コントラストの弱いものを無理に読めば、スペキュレーションが入る余地があるので、診断の上でも限界があるということを心得ておくべきであろう。また、急性腹症のX線診断においては、たとえば気腹像のような比較的疾患特異性のあるような所見は少ないので、X線写真だけで診断を下すことそれ自身に限界がある。診断の上で最も大切なことは、前にも述べたように総合判断であることを念頭においてこの書を読めば、必らずや得るところが大きいものと信ずる。

(B5・頁240・図108・写真161・
¥ 7,500・〒 200)